

【論文】

幸せな人生はいかにしてつくられるのか — 夫婦という倫理思想の〈物語〉をめぐる —

吉原 裕一

0 はじめに

古言に「棺^{かん}を蓋^{おお}いて事定まる」とあるが、それは世人の立場からの物言いであり、当の故人は己の死という初めての経験に手一杯で、自分の死後の評価への配慮など、なかなか及ばないことであろう。故人があくまでも己の死を受け容れまいと固執している場合はなおさらである。否応なく故人の肉体は死を迎えるが、死を乗り越えてなおこの世に留まろうとする情念が消えない限り、故人の心はこの世を離れることはないのではないか。

のっけから不吉な物言いとなってしまったが、本稿がここで扱おうとしているのは、まさにそういう話なのである。『諸国百物語』⁽¹⁾中の一篇「豊後の国何がしの女房、死骸を漆にて塗りたる事」では、若くして亡くなった女房が、夫の存在を通じてなおこの世に在り続けようとし、それが遂に果たせなかったという出来事が語られている。本論は、この女房の心の在りようを追いながら、彼女の願望がなぜ叶わなかったのかという理由について考察してゆきたい。失敗の原因を知ることは、成功への道を辿るために必要な過程である。彼女と同様に、人生の総体に関わるような切なる願望を抱く人がいるとすれば、前車の轍を踏まぬために彼女から学ぶところは大きいであろう。すなわち、本稿は、この女房の特殊な事例を俯瞰し、これを倫理思想として考える観点から、失敗の構造自体を明らかにすることを目的とするものである。

ところで、本論に入る前に、まずはこのテキストの思想史的な位置づけについて少し触れておきたい。出版物が著しく普及したわが国の近世

において、早くから確立したジャンルの一つにいわゆる「諸国話」ものがある。これは、各地で起こった奇怪な事件に取材し、それらをまとめた短編集の総称で、文学史上よく知られたものとしては、『宿直草』や井原西鶴の『西鶴諸国ばなし』などがあげられる。⁽²⁾

「諸国話」は、形式の上では『日本霊異記』を嚆矢とするわが国の説話集の系列に位置づけられようが、そのモチーフが従前とははっきり異なっている点にこそ、思想的な意義を認めるべきであろう。『日本霊異記』の書名が正しくは『日本国現報善悪霊異記』であるように、古くから編まれてきた説話集の多くは、〈因果の道理〉を説明するための「仏教説話」であった。これらは、民衆を教化する目的で、仏教思想の側から口承文学として流布されてきたのである。

ところが、戦国時代および安土桃山時代における社会と価値観の大転換を経た後、近世の人々は、もはや中世的な世界観の中に安住することはできなくなってしまった。自己の運命を切り開くために自らの實力だけを頼みとする下剋上の風潮は、あらゆる現象の説明に〈因果の道理〉を用いていたかつてのありようを否定したからである。もちろん、〈因果の道理〉がただちに効力を失ったわけではなく、曹洞宗の僧である鈴木正三(1579～1655)が〈因果の道理〉を主軸として仏法と世俗倫理との融合をめざしたように⁽³⁾、依然として〈因果の道理〉が民衆における道德観の一翼を担い続けたことも確かである。

しかしながら、近世の人々は、自己の生を〈宿世〉として仏のはからいに全て委ねるのではなく、そこに自助努力の余地があることを当然として受け止めていた。これは思想史の上では画期的な変化であったといえる。中世的な世界観においては、逃れることのできない〈宿世〉をなぞることこそが生の営みであった。たまさかに自らの〈宿世を見る〉ことがあったとしても、すでに定まった〈宿世〉自体を動かすことはできない。人は、仏にすがり善業を積み、よりよい後世を願いながらも、自らの〈宿世〉をなぞり続けるほかはなかったのである。

しかし、近世において戦乱の無い日常というものが現出するに及び、人々は世俗倫理への関心を強め、たとえば朱子学を受容に見られるように、彼岸ではなくこの人倫世界に生の意味を求めてゆく。これは、彼らが〈因

果の道理）にかわる（あるいは、これを補完する）新たな世界観を獲得しようとしていたことを示している。このような姿勢で近世の人々が自己の生を見つめるとき、それは定められた〈宿世〉ではなく、自己が構築する〈物語〉として感得されるに至ったのである。

〈因果の道理〉は全ての人を包含する理ではあるが、それゆえ自らの業に拠る〈宿世〉自体は全く個人のものであり、他者の〈宿世〉は本質的に自己とは関わりのないものであった。一方、〈物語〉は自己の生の総体を説明するものであり、自ずから一貫性を備えていること、ならびにそれが現世における他者の誰かとの間で共有されていることを必須の条件とする。自己と他者とが共有する〈物語〉は、その両者が相成す人倫世界の中に限っていえば、まさに共有されているという事実をもって道理たる資格を有する。〈因果の道理〉のように世界の全てを貫いていなくとも、自己を取りまく特殊な人倫世界の中で確かに成り立つ道理であるならば、自己にとって、その〈物語〉は普遍性という点で〈因果の道理〉に劣るところがない。すなわち、人の生とは、自己の〈物語〉を紡ぎながらもその中に他者の生を繰り込み、他者の〈物語〉をそれと認めつつもその中へ自己の〈物語〉を重ねてゆく相互的な営みなのであり、換言すれば、近世の人々は世俗の人倫世界を舞台に、自他が持ち合う〈物語〉の中を生きていたといえる。

「諸国話」は、こうした人々の新しい要求に応えうるような〈物語〉を孕んだ話の数々を提供したのである。そこには、〈因果の道理〉とは異なり、自らの思い^な倣しによって生きる人物像があった。書物を読むことが可能な文化圏にいる読者にとって、まだ見ぬ異郷あるいは辺境地域の不思議な出来事は彼らの知的好奇心を煽り、その中で語られる〈物語〉を、読者は自らの〈物語〉と重ねつつ辿ることができたのである。ここにおいて、近世の人々は、受動的に僧より「因果を畏るべし」という教説を与えられる「聴衆」から、〈物語〉を自分に重ねあわせ自己をとりまく人倫世界を知的に拡充してゆく積極的な「読者」へと変貌したのであった。「諸国話」を読むということは、〈宿世〉の内にとどまりきらない自他の生のありようを是認することなのである。

本稿では、上で述べた「諸国話」の特徴をよく窺い知ることのできる『諸

国百物語』のうち、「豊後の国何がしの女房、死骸を漆にて塗りたる事」⁽⁴⁾という話を取りあげ、〈物語〉が構築されてのち壊れてゆく過程を内在的に辿りつつ、その〈物語〉を一個の倫理思想としてとらえる視点から考察を加えてゆくことにしたい。

1 〈物語〉はどのようにして生まれたか

豊後の国に、ある夫婦がいたというありふれた事実からこの話は始まる。妻は「十七歳にて、隠れなき美人」であったと記されている。近隣で評判になるほどの美貌であったことが特筆されているわけだが、その後に述べられている「夫婦の仲よき事、たぐひなし」という記述をより重視すべきであろう。夫の「何がし」と、その妻は、仲睦まじい夫婦であった。しかも、この話には、どこにも子に関する記述がないことから、この二人はお互いに対する情愛のみによって結びついた間柄であったということになるのである。

仮に、この夫婦の間に子がいたのならば、後述するように妻が早くに亡くなったときも、夫は〈母を亡くした子の父親〉として、家族関係を自然に継続することが可能であったであろう。父と子の親子関係は、亡くなった妻をも含めた家族関係を基調として成り立つ。それにより、不在の妻は本来ここにいるべき欠落した存在として、より強く父子に想起され、妻は亡くなった後も変わらず家族の一員として彼らの意識世界の中に留まり続けるからである。しかし、この話においてはそうではなかった。

したがって、和辻哲郎の言葉を借りるならば、この二人は「親密なる我れ汝関係」すなわち「二人共同体」を構築していると言える。⁽⁵⁾「二人共同体」の特徴は、共同体を構成する二人の間には何も隔てるものがあってはならず、お互いが相手と不断に参与し合う反面、二人以外のあらゆる人々に対しては徹底して共同体への参与を拒むという点にある。

「二人共同体」は、やがてそこに子が生まれて「三人共同体」という社会になれば第三者へも次第に参与の機会が開かれてくるわけであるが、「二人共同体」の段階にあっては、社会がそれを婚姻という形式で外部

から承認するのみであり、共同体の内実に第三者が触れることはできないのである。その意味で、この夫婦は実質的に「男」と「女」であった。二人の関係を成り立たせていたのは、社会的承認の力ではなく、二人がお互いに結びつこうとする情愛の力であったからである。それを示しているのが、先に引用した「夫婦の仲よき事、たぐひなし」という事実である。（本稿では、これより後、この夫婦の夫を「男」、妻を「女」と記述する。）本書は、さらにこのように伝えている。

この男^{むつごと}つねづね睦言^{おんみ}に云ひけるは、「御身、われより先立ち給はば、二たび妻をも持つまじき」などと云ひかはしけるが、……。

この「男」の「云ひかはし」すなわち約束は、「睦言」として「女」に語られている。言葉を発する場に第三者が関わっていない以上、この約束の有効性は、それを受け取る「女」がどう思ったかという一点に依拠している。結論から言えば、「男」が「つねづね」口にする言葉を、「女」は信じたわけである。自分が相手のためにどれだけ犠牲的行為をなし得るかということで、相手への好意を示し歓心を買おうとしたのであろう、そんなたわいのない「男」の言葉であっても、「女」が信じたことによって、これは確かな約束として成立した。部外者たる我々の目には、当然、よくある類いの痴話としか映らないが、そうした社会的視点を「二人共同体」の内部に持ち込むことは無意味である。今は、「二人共同体」に生きようとする「男」と「女」の心の在りようを辿ることが目的なのであり、ここでは、「女」が信じたという事実を重視することが必要だからである。その信がどのような構造で成り立っているのかについて、以下、さらに考察を進めてゆきたい。

「女」が「男」の言葉を、まだ年の若さゆえに安直に信じ込んでしまったのだと見なしてしまうと、真実を見誤ることになろう。「隠れなき美人」であった「女」は、「男」が愛してくれる自分の美貌がもうすぐ盛りを過ぎて衰えゆくことを、年若いからこそ冷徹に見据えていたと推察する。（現代とは事情が異なり、二十歳ともなれば子を一、二人も生んだ年増になるのである。）もちろん、「女」は、「男」の「睦言」を聞

いて、さぞかし幸せな心地であったことであろう。しかし同時に、そう言ってくれる「男」の情愛が、ずっと続くものではないことも予想していたはずである。だからこそ、おそらく彼女は早く家の跡継ぎとなる子たちを産み育て、社会的見地からも安定した「三人共同体」を構築することを目指していたと考えられる。本文中に記述があるように、この家は使用人の女が複数いて、玄関から三間より奥の部屋がある造りなので、かなり裕福である。跡継ぎを産んだ主婦ともなれば、家に盤石の地歩を占めることができるし、それは「男」や「女」のみならず社会からも望まれた将来図であったはずである。

だが、不幸なことに、「女」はそこへ移行する前の「二人共同体」の段階で死を迎えることとなった。言うまでもなく、彼女はもっと長く生きていたかったに違いないし、人生で成し遂げたかったこともたくさんあったであろう。しかし、死を前にして、できないことばかりを悔いるのは無意義であるし、何より苦痛でしかない。「女」が必要としたのは、これまで実際に生きてきた人生を肯定すること、すなわち、己の人生の意義を現前の「二人共同体」の完成に求めることであった。そのためには、この「二人共同体」を不変のものとしなくてはならない、と死の間際で「女」は考えてしまった。移ろいゆくであろう「男」の情愛に今はすがることしかできない「女」は、「男」の「睦言」を〈物語〉として固め、そこに絶対性を見いだそうとした。つまり、このときの「女」には、「男」の「睦言」を信じるよりほかに道がなかったのである。（臨終で切羽詰まった「女」に対し、後知恵で、ほかに手段もあっただろうと批判するのは酷に過ぎる。しかし、この点については、5節であらためて取りあげて論じたい。）

およそ宗教的信仰というものが、信仰者にとってはほかに選択肢のない必然であるのと同様に、このときの「女」にとっては「男」の情愛だけが一縷の希望であったために、信が成立した。このことを踏まえるならば、以後に考察してゆく「女」の信の内容や「女」の行為について、これらは不条理であるといった批判が意味をなさないことは明らかである。「女」は、特殊な事情に追い込まれたあげく、特殊な決意をもって、己の人生を全きものにすることを願った。我々もまた構造的にはこの

「女」と同じように己の人生をよりよいものにしようという願いを持っているのだという地平から「女」の特殊性を考察することで初めて、それが他山の石となり得るからである。

では次に、「女」の信の内容について整理する。「男」が「睦言」で約束したのは、もしも「女」が「男」よりも先に逝去したならば、その後「男」は二度と妻を持つことはない、という単純なことであるが、ここから「女」が深い意味を汲み取ったことで、それが二人にとっての理想の関係の形となった。正確に言えば、「女」がこの言葉に深い意味を付与することによって、絶対性を含んだ、ある〈物語〉を構築したのである。以下、「女」の立場から、「男」の「睦言」を解釈してみよう。

先にも述べたように、婚姻とは社会的承認であり制度である。したがって、婚姻している一方が逝去したならば、この世に残されたもう一方が別の異性と新たに婚姻関係を結ぶことには社会的に何の問題もない。跡継ぎとなる子を育て、家を存続させるためには、むしろ再婚することは必要であるとさえ言える。しかし、情愛によって結ばれた夫婦の内実を考えるならば、事情は変わってくる。「男」の言葉通り、「女」が先に亡くなったとしても、「男」は婚姻関係を結ぶ前の独身状態に戻るわけではない。いわば、愛する妻に先立たれてしまった男やもめとなるのであり、相手を失った悲しみや寂しさを抱えた特殊な存在となるのである。その精神的苦痛を癒やすためにこそ、新たな相手と婚姻関係を結ぶことを周囲は、そして社会は勧めるかもしれないが、この「男」はそれ自ら拒むことを「女」に約束した。その意味するところは何であろうか。

「男」は、二人の夫婦関係が社会における一般的な婚姻とは質を異にするものであり、社会が意義を認めないところの夫婦の情愛こそが二人にとっては何より大切なのだという、特殊な世界観を「女」に示したのである。婚姻という社会的制度を実現する際に、仲睦まじい夫婦であることは必須の条件ではない。つまり、すでに言及したように、自分たち二人の絆を支えているのは社会ではなく、二人の情愛なのだということである。夫婦となった彼らの自意識は、独身の頃の個人ではなく、それぞれ、この「女」の夫、この「男」の妻、と称すべきものとなっている。

したがって、いまやこの二人にとって、お互いが守る夫婦関係こそが自分たちの存在意義であるのだと、（少なくとも「女」には）自覚されていたはずである。二人が共有する夫婦関係は、この世で唯一無二のものであると「男」は考えている（と、「女」は考えている）。たとえ、「女」がこの世から自分よりも先にいなくなってしまうとしても、「男」、は「女」が欠落してしまった夫婦関係を独りで守り続ける。二人の夫婦関係は、したがって、永遠に壊れることのない〈物語〉なのである、と「男」は「女」に伝えた。……正確に言えば、「女」は「男」の言葉から、以上のような〈物語〉を自ら紡ぎ出したのである。

こうして、「女」には、自分たちの夫婦関係が情愛に支えられた絶対的な「二人共同体」なのだという自覚がもたらされた。たとえ一方が死去したとしても、夫婦関係の〈物語〉はもう一方によって守り続けられる、という点に、まさに死にゆく「女」は救いを見ようとした。そして、先の「男」の「睦言」を根拠として、「女」はこの夫婦関係の永続性を信じた。言い換えれば、自分の存在意義は、そして生の総体の意味は、この「男」が与えてくれた〈物語〉によって永遠に守られると信じたのである。⁽⁶⁾

してみると、「女」と死別した「男」が再婚しないとしたら、社会的にはいろいろと不都合であって常識に反することになるが、それは二人の絆の本質に照らしてみるとむしろ当然のことなのであるという考えが成り立つ。極言すれば、二人のあり方が反社会的であるならばその事実がより一層、二人の絆が真実であることを示すということになる。反社会的に閉塞した夫婦関係の情愛において生き続けることを夢見た「女」は、非常識的な行為を通じて、それを実現しようと試みる。それについては、次節以降で考察するが、これまでに見てきた「女」の信の構造について、問題点を二つ指摘しながらまとめておきたい。

ここにおいて、「女」の〈物語〉は確立した。「女」は、「男」の約束の確かさを信じようとしている。「女」は、「男」が与えてくれる夫婦関係という〈物語〉の中に、ある絶対性を見出した。世の中がどう変わろうと、時がどのように過ぎ去ろうと、決して変わらないものがあるとは

れば、それは絶対性を備えた何かである。「男」とて、もちろん年を取るし、いずれは死を迎えるわけであるが、「男」が「女」に示してくれた〈物語〉だけは決して変わらない。「男」の「睦言」を材料として、このような世界観を紡いだ「女」は、死にゆく己に対する救いをこの〈物語〉に求めた。「女」は、死後も「男」がこの〈物語〉を守り続けてくれることを願い、それを実現させようと死後も努力を重ねてゆくのである。（「女」の死後の行いについては、3節で考察する。）

ところで、「女」の希望に水を差すわけではないが、実は「女」が実現しようとしている幸せな〈物語〉は、危うさを二つ内包している。それらを、問題点として指摘しておきたい。

一つは、時間というものに対する「女」の認識いかんについてである。「男」の「睦言」を聞いている、その幸せな一刹那こそが、永遠性の本質であることには論者も同意する。⁽⁷⁾

端折って言えば、「めでたし」という形で終わる物語は、そこで時間の経過が止まるからめでたいのである。一旦「めでたし」という完成形を成就したならば、変化することがあってはならない。完成形が失われては物語として無意義であり、めでたくないばかりか、後日談などが語られ出したならばそもそも話が終わらなくなる。つまり、幸せな状態では、本来、時間の経過は意識されないものであり、その意味では時間が存在しないと言ってよい。逆に言えば、時間が流れているところに幸せな状態は持続しないのである。しかし、「女」が果たしてそのことに気付いていたかどうかは疑問である。もちろん、「睦言」を聞いている幸せな状態であれば、そのようなことを顧慮する必要もない。問題は、その幸せな状態が失われて後、時間が流れている中でそれを回復しようと無理をする場合に生ずる。そのことは、あらためて5節で考察する。

もう一つは、「女」の信の逆説的構造についてである。先に述べたように、「女」は「男」の約束を確かなものとして信じた。そして、「男」の言葉が示す自分たち二人の夫婦関係に、ある絶対性を見いだしていた。「女」の意識に基づいて言えば、信じるに足る根拠は「男」の中にあるということになる。しかし、冷静に我々の目から見るならば、「女」がそう信じている事実の中にしか、「女」の信の根拠はないのである。

再び端折って言えば、ある信仰が成立するための条件は、たとえば神仏のような信仰対象が客観的真理を体現していることではなく、信仰者がとにもかくにも何かを正しいと信じていること自体である。信じるという行為は、客観的には正しいと証明して見せられないが、本人の意識においては証明不要で疑いようもない確かなことに対してなされるものである。ゆえに、信は、他者と共有することができない個人的意識の上にのみ成立する。つまり、信という行為は、信に関わる確かな根拠が当人の意識の中にしかないにもかかわらず、当人にとっては確かな根拠が信仰対象の中にこそあると思ってしまうような、逆説的な構造をもっているのである。

もちろん、「女」はそのことには気付いていないであろう。気付いていたなら、そこに信は成立しないのであるから当然である。しかし、「女」が、信ずる対象である「男」の方に目を向けるあまり、己の中にある信の根拠を無意識的に損なうことにでもなれば、それは問題である。そして、悲しいことに、その問題は実際に生じてしまうのである。そのことについても、3節ならびに5節で考察してゆきたい。

2 「女」が紡いだ〈物語〉とは何であったか

二人が順風満帆な暮らしを送っていたうちは、〈物語〉すなわち自分たち夫婦がどうあるべきかという倫理思想は、とくに必要ではなかった。しかし、幸せであった「男」と「女」の生活は、唐突に終焉を迎える。風邪のような病にかかり、「女」が急逝したからである。本文の初め部分にある話であるから、「女」は、まだ数えて十七歳のままであろう。若い身空で死を目の前にした「女」の心中はいかばかりであったかと同情するが、それ自体は本稿の主題より外れるので措く。これまで幸せな生活を送っていた「女」であるが、人生に満足してこの世を去ったわけではなかった。少なくとも、「女」が己の死という運命を受け容れず、抗おうとしたのは確かである。だからこそ、前節で述べたように、「女」は〈物語〉を構築し、それを守ることによって己の死を乗り越えようと

目指したのであったが、その実現には非常な困難がともなうこととなった。彼女は、以下のような遺言を残して死んだからである。

今はの時に、夫に云ひけるは、「われを不憫^{あびん}とおぼしめさば、土葬、火葬は無用なり。我らが腹を裂き、はらわたを取り出だし、内へ米を詰め込みて、上をば漆にて、十四へん、塗りかため、外面^{おもて}に持仏堂をこしらへ、我をその内に入れ、鉦鼓^{しょうこ}を持たせ置き、朝夕我が前にきたり、念仏をすすめてたべ」と、云ひ置きて、遂に空しくなりける。

ところで、夫婦関係にある二人にとって、相手と死別するという事態は必然的に訪れるものである。「女」の死は十七歳の時であったが、たとえ年齢がいくつであろうとも、この愁嘆場はいずれ必ず実現する。したがって、この「女」の遺言は、「女」が二人の関係の本質をどのように捉えていたかという観点から理解すべきであろう。「女」は「男」の〈物語〉を信じ、自分が亡き後までもその〈物語〉が続くことを最後の願いとして、遺言を残した。ここで、その内実を詳細に考察してゆくことにしたい。

「女」は、「男」に「われを不憫とおぼしめさば」と言った。これは、自分が死して後もなお、生前と同じように愛憐の情を注いでくれるのかという「男」に対する問いである。もし、「男」がこれに否と応えたならば、全ては烏有に帰すのみであったが、結果としてはそうでなかった。「女」の望みは、「男」にまず聞き入れてもらえたわけである。

「土葬、火葬」すなわち葬儀と埋葬は、故人がこの世から去ってしまったことを関係者全員で確認し、同時に、故人がいない世界で自分たちは関係を再構築して生きてゆくことを確認する儀式である。これを行うということは、死んだ「女」を社会的にも葬り去ることを意味する。すなわち、「女」が「男」に望んだのは、「女」が身体的な死を迎えても夫婦関係を終わったものとはせず、「男」は「女」が生きていたときと同じ生活をしてほしいということである。このこと自体は、「男」の「睦言」の内容と同じであるが、「女」はそこに新たな二つの要求を盛り込む。自分の身体を保存すること、ならびに、生前と同じように夫婦二人

だけの時間を過ごすことの実現である。まず、前者の要求から検討してゆきたい。

ところで、「男」がもともと「睦言」の中で自らイメージしていたのは、「女」が不在になった後も自分は心の中では「女」のことを忘れずにいるというような抽象的かつ感傷的な内容であったかもしれない。「二たび妻をも持つまじき」という言葉は、独り身になってもそのまま独りで生きてゆくという内容を端的に示しているに過ぎないからである。

しかし、「女」はそれでは満足できなかった。「男」の「睦言」が「女」を目の前にして発せられたものである以上、「女」が「男」の目の前から消えてしまえば、それはもはや発せられなくなる。自分の死後、「男」が次第に自分を忘れてしまい、「男」が約束してくれた情愛が消えてしまうことを「女」は恐れた。それは、永続するはずの〈物語〉が失われることを意味するからである。

だからこそ、「女」は、「男」のかたわらに常に実在していることこそが必要なのであり、自分は死後もそれを実現し続けなければならないと覚悟したのである。彼女が死後に自分の身体の保存を求めたのは、夫婦関係の〈物語〉を守るためであった。しかし、これが著しく実行困難な試みであったことは確かである。例を挙げ、この点について少し言及しておく。

話が少し逸れるが、愛する女とはいえ、遺体となってしまったなら、その身体はなべて不浄なものである。男が女の死後に愛想を尽かす例としてまず想到するのは、『古事記』上巻に記されたあまりにも有名な話であろう。⁽⁸⁾伊邪那岐命^{いざなぎのみこと}は亡くなった妻の伊邪那美命^{いざなみのみこと}を訪ねて黄泉国^{よみ}へ行くも、腐敗してウジがたかる妻の身体を見ておののき、逃げ帰る。その後、夫婦であった二柱の神々は別離することとなった。また、別の例としては、『今昔物語集』巻第十九の「参河守大江定基出家する話第二」において、愛する女が病死した後、悲しみのあまり葬ることもできず、女を抱いたまま共寝をしていた大江定基（後の寂照）が、数日たつて女の口を吸ったところひどく臭かったので、疎ましく思って葬ったという話が伝えられている。⁽⁹⁾ともに、男は死後も生前の女の面影を求めながら、遺体の不浄という現実の前に挫折しているのである。否、腐敗

していなくとも、不浄観は人の身体そのものを厭う。源信の『往生要集』では、「少きより老に至るまで、ただこれ不浄なり。海水を傾けて洗ふとも、浄じようけつ潔ならしむべからず。外には端たん巖ごんの相を施す（端正に美しく装う）といへども、内にはただもろもろの不浄を裏つつむこと、猶なほし画えがける（きれいに彩色した）瓶に糞穢ふんえを盛れるが如し」「当に知るべし、この身は始終不浄なることを。愛する所の男女も皆またかくの如し」と、愛する相手の身体に執着することそのものを戒めている。⁽¹⁰⁾

話を戻そう。「女」が「男」に求めたのは、まさにこうした不浄観を乗り越えるという非常なる努力であった。生前の「女」は確かに「隠れなき美人」であったかもしれないが、「腹を裂き、はらわたを取り出し、内へ米を詰め込み」という凄惨な作業を現実に行うなら、好き心など吹き飛んでしまう。もし、そういう努力が可能であるとすれば、それは亡き「女」を不憫に思い、せめて遺志を尊重してやろうとする希有の真情によってでしかない（あるいは、逆に何も考えず唯々諾々と遺言に従うことによっても実現したかもしれないが）。身体を切り開く段階で「男」に愛想を尽かされる真おそれは多分にあったが、「女」はこの「男」の可能性に懸けたのである。そして、幸いにも、「女」の願いはここでも聞き届けられた。驚くべきことであるが、遺言通り、「女」の身体は漆で固められ、亡くなったときの姿のままで、庭に建てられた持仏堂に安置されたのである。

次に、「朝夕我が前にきたり、念仏をすすめてたべ」という「女」の二つめの要求について検討する。本来、念仏を称えるのは、阿弥陀如来の導きによってこの世を離れ、極楽浄土へと往生するためである。しかし、「女」は死んだ後もこの世を離れる気持ちは全くないのだから、この念仏には別の意図がある。すなわち、生前と同じく、夫婦二人だけの共同体を実現し、その確認を日常的に反復することが、「女」の目的だったのである。

先にも見たように、「二人共同体」の特徴の最たるものは、第三者の参与を徹底して拒む点にある。具体例を挙げるならば、夫婦が「睦言」を言い交わしているような場面は、第三者がそこに関与するべきではないし、そもそも関与できるものでもない。つまり、「二人共同体」が成

立しているときには、彼らは自然と反社会的なあり方を実現することになるのである。

仮に、「男」が阿弥陀如来像に向かって、毎日「女」の往生を願い祈っていたならば、それは社会的にも認められる追善供養の形であると言える。しかし、男が毎日の朝夕に向かっていたのは、漆で固めた「女」の遺体である。本文の記述によれば、「それより^{おた}とせばかり、妻をも持たず、念仏してゐける」とある。妻を亡くした後、埋葬もせず、その遺体を保存して毎朝毎夕向かい合って二年を経過したという男の行動は、いかに異様であり、第三者からすればぞっとするような理解不能の奇行である。しかし、その反社会的な「男」のあり方こそは、「女」が望んだものであった。「男」が、第三者にとっては非常識な形で「女」に関わり続けることが、社会とは別の「二人共同体」があいかわらず成立している証左となるからである。「女」はこうした形で「男」を拘束し、閉塞的な「二人共同体」を存続させることを目指したのである。ここでも、「女」の遺言は守られた。

以上、見てきたように、「女」が遺言として残した願いは、「男」の努力によって完全に叶えられた。すなわち、「女」が望んだ〈物語〉は、「男」が努力して為した具体的な事実として結実し、それらを介してこの世に実現したように見える。ここで本文が終わるのならば、「女」にとっては全く「めでたし」ということになったであろうが、残念ながら話はこの後も続いてゆく。そして、結論を言うならば、「女」の〈物語〉は最後には明らかに壊れてしまうのである。

完成した〈物語〉であれば、決して壊れることはない。それが壊れるのは、完成したと思われたものが、実際には不完全な形であったためである。次節では、完成したと思われたはずの「女」の〈物語〉のどこに問題があったのか、なぜそれが顕在化したのかという点について考察してゆきたい。

3 〈物語〉のほころびはどこから生じたのか

「男」は、「女」の遺言通り、二年ほど「女」の遺体と向き合って暮らしていた。これは社会的に見て、明らかに異常である。だからこそ、「友達、無理にすすめて、妻を持たせける」という事態になったわけである。

「友達」すなわち社会の常識的視点からすれば、「男」の奇行は妻を失った悲しみで心を病んでいるためであり、是非とも彼をこの閉塞的で不健全な状況から救い出してやらねばならないと考えるのは自然なことである。繰り返し言及したように、「二人共同体」と社会は本質的に相容れない。男女が婚姻という形式を取っている限り、社会はその二人の内実に立ち入ることはないが、この話のように「男」が寡夫となってしまった以上、社会はこの「二人共同体」をすでに消滅したものと見なす。社会にとっては目に見える事実が全てであるから、亡くなった「女」の遺志を顧慮することはない。大事なのはこの世に生きている「男」の方であるから、彼を再び社会の一員として健全な日常に復帰させようとすることは、社会の側から見て良心的な配慮であると言える。

ともあれ、社会は、「男」のためを思って、新たな妻となすべく女を家に送り込んできた。それは事実である。このとき、「男」が新たな妻を持つことになり、どのような気持ちであったのかという点に関しては、一切の記述がない。「友達、無理にすすめて」というくだりから推測すれば、「男」は「友達」の強い説得を受け、それをもっともだと思ったからこそ再婚する気になったのであろう。

いわば、以前に妻の遺言を受け容れ、素直に従ったように、今度は「友達」の勧めを受け容れ、素直に従ったわけである。論者は、これを「男」の変節だとは見なさない。もともと、「男」は節を守っていたわけではないと考えるからである。「男」が妻の遺言を守ったのは、その具体的な一々の事柄を、言われた通りに実行したに過ぎない。「女」がどのような思いでその遺言を残したのかという意図を察してのことではない。つまり、「男」は「女」の遺志を汲み取っていたわけではなかったのである。そして、悲しいことに、「女」はそのことをあらかじめ理解していた。だからこそ、自分は死んでも無理にこの世に留まり続け、自分の

遺志を自ら守り続けなければならないと覚悟したのである。その意味で、もともと男の言葉から生まれた夫婦関係の〈物語〉を守るのは自分の役割だと、「女」は自覚していたことになる。死後に男が守り続けてくれることで成り立つはずの〈物語〉を、「女」が自ら守ってゆかねばならないという構造的矛盾がある以上、これは完成した〈物語〉ではありえない。いずれ、必然的に破綻するときが来ることは、避けられなかったわけであるが、「女」は、その破綻を防ぐべく必死の努力を続ける。以下、死後に「女」が〈物語〉を守るためになした行為について、考察を加えてゆきたい。

「女」は、新しく来た妻たちを次々に追い出しにかかる。漆塗りの異様な姿で、「男」の留守を見計らい、妻たちを密かに脅したのである。「女」が新しい妻たちを追い出したのは、彼女たちが「二人共同体」すなわち「男」と自分だけの夫婦関係を守り続けるのに邪魔だと感じたからであった。彼女たちさえ家からいなくなれば、また、「男」は「女」だけを毎朝毎夕大事にしてくれる生活が戻ってくるのだと「女」は信じて、妖怪じみた行為を繰り返したのであった。我々の目からすれば、「男」の「二たび妻をも持つまじき」という約束はすでに破られているのだから、「女」の努力は無駄であるようにも見えるが、彼女にとってはそうではない。「男」が再婚していない状態という事実さえ実現していれば、「男」の言葉の内容すなわち夫婦関係の〈物語〉は破綻していないと判断できる、と「女」は信じているのである。なぜ、そう信じられるのか。

「男」は、とにもかくにも、「女」の遺言を二年間ばかりは実行した。先に言及したように、論者はこれを「男」が遺言の指示にそのまま従っただけだと見なしている。もしも「男」が「女」の遺志そのものを理解していたのなら、どんなに周囲が勧めても後妻を迎えることはしなかったであろうし、なにより妻を漆塗りの異様な姿になどできないはずである。（「女」が死後もこの世に留まり続けようとするのは、忌憚なく言えば「男」への不信が根拠となっている。それゆえに遺体を残しつつ、「男」を監視しようとしているのだから、その意図の恐ろしさに気付いていれば、とても「女」の遺言を実行することはできなかったであろう。）

しかし、「男」が約束を忠実に守ってくれたという解釈もできるこの事実が、「女」に希望を与えたのである。「女」が逝去した後の二年間は、「男」が「女」の無理な要求に全て応え、「女」の遺言が完全な形で実現した幸せな期間であった。その実績が、こうした生活は「男」が死を迎えるまで、ずっと続くに違いないという希望を「女」に抱かせるに至った。つまり、「女」は、二人の〈物語〉が破綻することはないと心に期待を結んだのである。期待とは、すでに確定した過去の実績に照らして、きっと未来にも同様のことが実現するだろうと現時点で十分に予測できるときに成り立つものである。「女」が、この「男」の実績に期待したのも無理のないことであった。

したがって、「男」が初めて後妻を迎えたとき、本当は「女」は強いショックを感じたことであろう。しかし、彼女はそこで期待をあきらめることをしなかった。あきらめてしまえば、すでに死んでいる彼女には新たな〈物語〉を紡ぐことなどできないのだから、そこで彼女の人生の意義はすっかり失われてしまう。「女」は、ここでも「男」の可能性に懸けたのである。家の中に邪魔な第三者の女さえいないのであれば、夫婦の〈物語〉は続いているのだという解釈の余地が生まれる。もしも「女」が、「男」と後妻を前にして約束の不履行をなじるようなことが起こったなら、それこそ「女」が自ら〈物語〉の破綻を認めることになってしまう。ゆえに、「女」はあくまでも「それがしが、参りたること、かまへて夫に語り給ふな」と、後妻たちに釘を刺す必要があったのである。

かくして、何人もの後妻たちを、次々と追い出して〈物語〉を守り続ける「女」には、ほかに取るべき道はなかった。そもそも「男」が守ってくれるはずの〈物語〉を、実質的には「女」が暗躍することによって、「まだ守られている」という体裁をかりうじて保つのは困難なことであるが、それが可能であると信じることでしか、「女」の不幸な人生に救いはなかったのである。「女」は、己の人生全てを懸けた〈物語〉を守りきることが、己のそして二人の幸せであると信じた。後妻を追い出すことは、「男」のくれた〈物語〉を守ることにほかならないのだから、それは「男」のためにも役立っていると彼女は確信し、せっせと励んでいたわけである。そして、「女」の企ては功を奏し、後妻たちは次々と

家を出て行くのであるが、しかし、「女」の信は、ついに挫折するときを迎えてしまう。彼女の〈物語〉は、最悪な形で破綻してしまうからである。

その概要については次節で扱うこととし、ここでは「女」の〈物語〉が破綻するに至った原因が、運命などの外部的要因ではなく、〈物語〉の構造そのものにあったということを指摘してまとめておく。

上で見てきたように、もともとは「男」が与え、二人で共有すべきものであった〈物語〉を、結果的に「女」が独りで支えようとしたことが一つめの失敗であった。二人の〈物語〉であったはずのものが、「女」の〈物語〉へと変容してしまった時点で、必然的に「二人の〈物語〉」は壊れているのである。「女」は、〈物語〉を守ることに固執するあまり、その内実から「男」がこぼれ落ちてしまっていることに気付かなかった。

そして、二つめの失敗は、「女」が自分は何を本当に信じているのかということを見定めていなかったことである。自分のことを「不憫とおぼしめ」してくれる「男」の真情なのか、自分の遺言をともかくは「男」が実行してくれる現実なのか、それとも〈物語〉は自分が頑張ることで守りきれんという希望なのか。結局、「女」は変化してゆく状況の中で、自分が信じるものを場当たり的に変えてしまっているように思われる。対象が揺らいでしまうならば、それは信としての力を持ち得ない。何があってもこれだけは決して変わらないと信ずる絶対性が、複数で並び立つようなことはないからである。信ずる対象を、いわば自分が信じられるものへとスライドさせることは、畢竟、何かを信じきれないという疑いを差し挟んでいるからであり、そんな状態の心において、絶対的な信が成り立つことはない。したがって、「女」の〈物語〉の核心であったはずの信は、最後に「女」が気付いたときにはそこに存在していなかった。彼女は、自分が信じていたはずのものがどこにもないことを初めて知り、絶望するほかはなかったのである。

4 なぜ〈物語〉は瓦解したのか

この後の話の顛末を略述しておく。「女」は、次々と後妻たちを脅して追い出してゆくが、その際「男」には決して自分のことを話すなど口止めするので、「男」はなぜ後妻たちが居着かないのかを訝しむ。ところが、ある後妻の一人は問い詰められたために「男」に「女」のことを話してしまう。「女」は、約束を破った後妻の首を捻じ切って殺す。帰宅した「男」が持仏堂を開けて見れば、「女」の足下に後妻の首がある。そこで「男」が「さてさて、汝は卑怯ものかな」と言って「女」を持仏堂から引き摺り出すと、「女」は眼を見開いて「男」の喉頸にかみつ、「男」も息絶える。

なんとも不幸な話の終わり方であるが、「女」が最愛であったはずの「男」を殺すに至った心の移り変わりを、〈物語〉の崩壊という観点から考察してゆきたい。

「男」は、「女」のことを「卑怯もの」だと言葉で非難した。卑怯とは、正々堂々としていないさまを指す。したがって、「男」は、自分の目の届かないところで、「女」が隠れてこそこそと後妻たちを脅していたことを知り、その態度をなじったわけである。つまり、「男」の立場からすれば、この「女」は、もはや後妻との新たな生活を密かに妨害し続けていた邪魔者でしかない——このような「男」の気持ちが明らかとなったわけであるが、それは「女」にとっては到底受け容れることができない現実であった。どのように解釈を加えようと、この「男」の言葉は、「女」の信を真っ向から否定するものである。「男」がかつて「睦言」という言葉で約束してくれたことから始まった夫婦関係の〈物語〉、すなわち「女」がこれまで（意識上では）信じ続けてきた〈物語〉は、「男」の心無い言葉によって、雲散霧消したのである。否、消えてしまったと言うよりは、もともと存在していなかった幻を自分独りが信じ込んでいたことを、彼女は思い知らされたのである。

呆然とした「女」は、ふと我に返り、自分が惨めな妖怪に堕していることに初めて気付く。死してなお遺体のままこの世に在り続けようと願ったがゆえの異常な姿、しかもそのあさましさに気付かなかったのは、全てがこの「男」と自分の幸せを守るための善いことだと信じきっていたからであった。しかし、絶対的な「二人共同体」を築いていたはずの

相手は、頼むに足りない不実で凡庸な男に過ぎなかった。己の人生の意義はこの世界のどこにも存在してなかったことを知り、瞬時に自他と世界の全てに絶望した「女」は、「男」を殺してしまったのである。感情的に逆上したからではなく、むしろ逆に、今まで自分が信じてきたものの象徴である「男」を冷徹に抹消することで、「女」は全ての執着を断って己の人生を本当に終わらせたのだと言えよう。

仏教的な視点はさておき、あくまでもこの世俗における幸せを求めていた「女」にとっては、不幸な最期である。しかしこの事態を招いた原因は、口を割った後妻でも、不実な「男」でも、運命的偶然でもなく、「女」自身の〈物語〉内部にある。〈物語〉のほころびを修復しようと「女」は懸命に試みるが、実際にはそれが無理であることを彼女は無意識のうちに隠蔽し、考えないようにする無理を重ねていた。強調するならば、「女」が己の〈物語〉の絶対性を信じようとしながら、その信を自ら失ってしまったときに、「女」の必然的な不幸は準備されてしまったのである。

5 幸せな〈物語〉のために

これまで、「女」の〈物語〉が構築され崩れてゆく過程を詳細に見てきたが、では逆に、どのようにすれば最期まで彼女は〈物語〉を守ることができたのかという視点から、あらためて考察を加えたい。幸せな〈物語〉というものが、どのようにすれば実現可能なのかという問題を取りあげることは、我々に反省材料を提供してくれた「女」に対する追善供養、あるいは恩返しにもなるであろう。

以下、「女」の立場に即して問題点を挙げてゆくが、それは「男」ではなく「女」の側にだけ問題点があるという趣旨ではないことを断っておく。第三者の目から見れば、この「男」が頼むに足りない人物であることは明らかである。本来ならば、「男」が自ら、臨終の「女」に安堵を与えるような言動を実現してくれるのが理想的であるけれども、それは彼に期待すべくもない。（本稿において、「男」はこうあるべきだとい

うような指摘をしていないのは、その理由による。）しかし、先述したように、「女」はこの「男」を頼りとするほかに方法がなかったのである。その選択をそもそも誤りだと言うのは、「女」に対して酷に過ぎる。したがって、ここでは、「女」が「男」を信じることを前提とするのなら、以下のような点についてもう少しうまく出来ていれば、あのような悲惨な結末にはならなかったであろうということを述べてゆきたい。くどいようだが、「女」だけを批判しているわけではないことを強調しておく。

3節で言及したように、〈物語〉はそもそも自他で共有されることを前提とする。一個人の奇妙な妄念に過ぎないことも、誰かが真にそれを理解し共有してくれたならば、それは彼らの〈物語〉となる。したがって、この話の場合、「女」はまず己の〈物語〉を「男」と共有することを確保すべきであった。「男」は確かに「女」の遺言には従ったが、それは〈物語〉を理解し共有したからではない。ひとまず、女の指示に従っただけなのである。

もちろん、唐突に死を迎えることになった「女」には、「男」と〈物語〉を自然に共有できるための十分な準備期間はなかったはずである。しかし、ではどのくらいの時間を夫婦として過ごしたならば、もう十分に準備ができるのかという指標などはもちろんない。だから、結局は、実際に「男」と暮らした日々がどれほどであっても、とにかくその経験を基に〈物語〉を構築し、「男」と共有するほかはないのである。かく、時間をどのように捉え、意味づけるのかという問題は、1節の終わりでも指摘したが、「女」のみならず我々もまた抱えている共通課題であると言えよう。

あらためて見れば、「女」は、「男」の「睦言」を聞いたとき、確かに幸せだったのである。彼女の不幸は、それを自分の死後にも、もっと聞きたいという叶わぬ願いを抱いたことから生じた。では、彼女はいつまで「睦言」を聞ければ、満足したのであろうか。たとえば、「男」が死ぬ迄であろうか。男の死期とて、それが「女」が死んだ後の翌日なのか、百年後なのかは不明であるが、どちらの場合でも彼女は満足するのだら

うか。——おそらく、「女」が決して満足することはないのである。未来に得られるものに期待して、それがもっと欲しいと現在において願う限り、満足はありえない。そうすると、絶対的な満足には無限の未来というものが必要になってくるが、それを人が現実世界で求めることは無論不可能である。

したがって、1節でも指摘したように、時間をどのように捉えるのかという意識が問題となるのであるが、端的には、相手とその意識を共有することでその解決を図ることが可能である。ままたらない現実の時間というものは、時間を〈物語〉の中に組み込み、その〈物語〉を共有する二人が同じ時間を生きるという意識を持つことによって、問題視する必要がなくなるからである。

時間とは、客観的物量ではなく、あくまでも我々の意識現象である。愉快な時間が過ぎ去るのは早く、退屈な時間が停滞するのは遅く感じられるが、時間の本質はまさにそうした意識にこそある。したがって、永遠と無限の違いは、質と量の差である。過去にずっとそうであったことが、未来にもずっと変わらないことを、現在において確信するのが永遠を信じるということである。永遠とは、無限の時間ではなく、意識現象においては絶対的なものが実現する一刹那なのである。（たとえば、「男」が、永遠にあなたを愛しているということを本気で言い、「女」がそれに本気でうなずくならば、その刹那に二人は永遠というものを確かに実現しているのである。第三者の視点がそこに入り込む余地はない。）

「女」は、「男」の「睦言」を聞いたとき、その一刹那において己が絶対的な幸せの中にあることを信じることは可能だったのである。同様に、「われを不憫とおぼしめさば」と「男」に求めた遺言が実行されて、持仏堂に納められたときに、もう思い残すことはない満足することもできたはずである。「もっと」とさらなる幸せを求めるということは、現時点における「すでに実現している幸せ」を否認することを意味する。己の意識というものは常に現在において存在するものであるのに、その現在を否認して未定の未来へと目を向け続ける行為は、永久の不満足状態しかもたらさない。「女」は、「御身、われより先立ち給はば、二たび妻をも持つまじき」と「男」に言われたとき、ただうなずけばよかった

のである。目の前で「男」が語る言葉を、「女」がその場で信じさえすれば、それは二人の間において共有される〈物語〉として確立する。男の約束が、本当に将来にわたって履行されるのかという疑いを持つのなら、それは〈物語〉ではなく契約である。「女」が求めた、情愛に基づく夫婦関係とは本来、そういうものではあるまい。お互いが隠し事をせずに徹底的に参加しあう間柄には、相互の信頼が不可欠であろう。信頼とは、相手の未来を現在において担保することである。「女」の死後も、「男」は現実の時の流れを生きていたわけであるが、「女」は「男」を社会から隔離し、「男」が変化しないことを求めた。いわば、「女」は自分の人生が時間を止めた後、ずっと「男」の時間が止まらないことに苦しみ続けていたのである。「女」が「男」を信頼できなかった理由はさておき、信じることができなかった事実が「女」を不幸にしたのは確かであったと言える。

以上をまとめるならば、「女」は「男」と暮らした過去をもとに、現在の絆を肯定できる〈物語〉を構築し、それを現時点において「男」と共有することが必要であったということになる。不定の未来ではなく、過去の経験を踏まえつつ、二人が共有している現在を善いものと解釈し肯定することで、二人は意味のある〈物語〉を紡ぐことができる。しかも、この〈物語〉はお互いが信じている真実なのだという意識が共有されるならば、二人の間ではその一瞬一瞬において、幸せが実現していることになる。幸せな人生とは、その長短に関わらず、真の幸せな一瞬一瞬が積み重ねられたものの総体である。「男」と一緒に幸せを実現しているこの瞬間こそが唯一の実在なのだという最も大切な視点を見失っていた「女」は、死後にいつ果てるともない時間の拘束に苦しめられることとなった。絶対性は、永遠の一刹那にこそ立脚するのである。

もう一点、1節の末で指摘した信に関わる問題を取りあげておきたい。信も、先述した時間と同様に我々の意識上の現象であるが、逆説的な構造を持っている点に注意を要する。すなわち、我々が何かを信じるとき、その信を成り立たせているものは実は我々の意識にあるのだということである。

したがって、すでに見たように、「女」が「男」を信じきれずに後妻たちを追い出す苦闘を続けなければならなかったのは、実は「女」の意識の中に問題があったのである。「女」は、「男」が自分の遺言を実行しているかどうかという点で、〈物語〉が守られているかどうかを判別しようとした。すなわち、「男」への信頼ではなく、絶えず変化してゆく状況を追跡することで、安心を得ようとしたのである。この試みは、やはり果てることのないため、必然的に「女」は安心を得られないことになる。

先の繰り返しになるが、あらためて見るならば、「男」が「女」に「睦言」を言ってくれたとき、それが二人の間だけの幸せとして実現していたのは確かである。それは変わることのない不動の真実であり、第三者はおろか「男」であってもしはや侵すことなどできない「女」の大切な〈物語〉となったはずなのである。たとえ短い期間における間柄であっても、「男」が「御身、われより先立ち給はば、二たび妻をも持つまじき」という絶対的な絆を与えてくれた瞬間は、「女」の人生の中にまぎれく存在した真実である。それは、「女」が覚えている限り、決して消えることはないのだから、「女」はその意味をしっかりと捉えておくべきであった。〈物語〉とは、過去に紡がれた部分をもとに現在において紡ぎ続けるものである。過去や現在の蓄積がないところに、未来を思い描けるわけではないのである。

この話においては、もちろん「女」は「男」を信じたいと願っていたのであるが、もう一つ高い見地から、「そのとき「男」を信じると決めた己」を信じるべきであったと言えよう。「女」が本当に欲していたものは、「男」が行っている日常の些事を追うことではなく、決して壊れることのない〈物語〉が「男」との間に共有されることであったはずである。それならば、かつて「男」が自分にくれた一瞬一瞬は、自分だけの絶対的な〈物語〉なのだと彼女は信じさえすればよかったのである。自分が確かに「男」から情愛を注がれていたのだという記憶を、大事な冥土の土産として、彼女は満足して旅立つこともできた。たとえ、自分の死後に「男」が再婚したとしても、かつて「睦言」で約束してくれた「男」と自分との絆が真実であった瞬間は、消えることはない。

すなわち、「男」と自分との間に、特殊で固有の「二人共同体」は確かに実現していたのだと「女」が信じる限り、その後の「男」の半生がどう転んでも、二人の人生における〈物語〉は決して壊れることがない。それが、「女」における、「男」を信じると決めた己を信じる」ということである。

それなのに、「女」は、「男」にとって特別な存在であったはずの自分と、後妻の女たちとを同列に考えてしまい、「男」の行く末を見届けようとしている間に、自分に対する信を自ら失ってしまった。結局、「女」は、「男」のみならず「男」を信じる己さえも信じることができなかったのであった。自己の運命を受け容れられず、それにあくまでも抗おうとしながら、有効なすべを実現できなかった一人の「女」の悲しい遺志は、ただいたましい限りである。

そもそも、信じるという行為は、相手に対する疑いをすっかりなくし、信じた結果がどうなるかという関心を捨てたところにしか成り立たない。もちろん、この相手を信ずべきかどうかということについては、事前にじっくりと吟味することが必要であろう。しかし、可能な限りの吟味を終え、この相手を信じようと一旦決めたからには、後戻りをしてはならないのである。すなわち、相手を信じるときには、その信に関わる一切の判断が停止するために、相手に対する全幅の信はその後に変化することがない。（変化するとしたら、それは信が壊れ、不信へと陥ったときだけである。）いわば、信においては、時間が流れることはないのである。信とは、All or Nothing であり、少し信じるとかあまり信じないという表現は、内容的に正しいものではない。「女」は死後に、「男」の行く末を見届けようとしたが、それを「信じ続けようとする行為」と表現するなら、やはりそれも正しいものではない。信がごくわずかでも「減じる」ということはありえないのであり、その状態は「不信」と表現すべきものである。

まとめるならば、したがって、信じるとは相手に対する一切の期待を完全に放棄する行為を意味する。絶対の信は、相手を信じることを決意し、未来に関する全ての結果を諦めた刹那に、永遠に実現するのである。

かく見れば、この話の全体において「女」は不幸な結末を迎えたわけであるが、同時に、「女」が迎えた死それ自体が決して不幸なものではなかったこともわかる。若くしてこの世を去らねばならなかった「女」は、この世に思いを残し、己の遺体をその憑坐^{よりまし}とした。しかし、彼女はそんな無理をする必要はなかったのである。「女」は、己が守りたかった大事な〈物語〉を、すでに胸に抱いていたはずなのであるから。あとは、先に指摘した点について、少し慎重に踏まえておくべきだったというのみである。

いや、もう一步考えを進めて、「女」を眺めてみたい。本当に彼女は不幸でしかなかったのか。

「女」は、残してゆく「男」に不安を感じて行く末を見届けようとしたこと、すなわち彼女自身が「不信」と「時間」によってこの世に縛られたことが原因で、妖怪となってしまった。だが、ひょっとしたら、「女」は最後に、上述した自分の過ちに気付いた可能性もある。物語の末尾において、「女」は「眼を見ひらき夫の喉頸に喰ひつ」いたという記述があるが、このとき、両眼だけでなく彼女の心の眼が開いたことも十分にあり得るからである。「女」は、己が今まで為してきたことの無益に絶望すると同時に、全てを諦めて己の死を受け容れたのかもしれない。

「男」を殺したのは、色好^{いろよ}い言葉で期待を持たせながら、結局最後は辛酸をなめさせられることになった「男」の不実に、別れの挨拶として報いた結果であろう。そのように考えるならば、この物語自体も幸せな結末を迎えたと言うことはできる。「女」は、「男」を頼みとすることですずっと抱えてきた苦しみを、関係を清算して手放すことができたからである。

論者は、「女」への追善供養だと思って真実の追究を尽くしたが、もって瞑すべしと納得してもらえたかどうかはわからない。さらなる考察を進めることを後日の課題とし、本稿はひとまず擱筆することとしたい。

注

- (1) 『諸国百物語』は編著者不明、延宝五年(1677)の開板。各巻二十話の五巻組

から成り、書名通りに百話を収める。なお、『諸国百物語』については、拙稿「自己実現の「物語」をめぐる一心中という倫理思想」（『国士館哲学』第14号 p. 70-87、国士館大学哲学会、2010年）にて「江州、白井介三郎が娘の執心、大蛇になりし事」を取りあげて詳しく論じている。

- (2) 『宿直草』は延宝五年(1677)、『西鶴諸国ばなし』は貞享二年(1685)の開板。
- (3) 鈴木正三とその門人たちによる唱導活動は、『平坂名本 因果物語』『片仮名本 因果物語』（開板は寛文元年1661か、それ以前）などの成果を残している。これらの編集意図は、古い伝奇的な仏教説話集とは一線を画し、確かな事実として認められる記事だけを〈因果の道理〉の「証拠」として提出することにあった。こうした実証主義の姿勢は、広く近世的な傾向であるともいえるが、正三においてかくも先鋭的に顕れているのは、やはり彼の前身が、理屈ではなく確かな事実だけを重んじる武士（徳川家康・秀忠に仕える旗本で、関ヶ原や大坂城攻めにも参加したが、四十二歳で出家した）であったことに起因すると思われる。この点に関しては、本稿の主題から外れるので、ここでは指摘するにとどめておく。
- (4) 『諸国百物語』のテキストは、高田衛編・校注『江戸怪談集（下）』岩波文庫、1989年、に所収のもの（東京国立博物館蔵の完本を底本とする）に拠った。本稿でとりあげた「豊後の国何がしの女房、死骸を漆にて塗りたる事」の全文を、以下に引用する。ただし、括弧内の注記は、論者が付した。

「豊後の国何がしの女房、死骸を漆にて塗りたる事」

豊後の国に、何がしのありけるが、此の妻、十七歳にて、隠れなき美人にて、夫婦の仲よき事、たぐひなし。この男つねづね睦言に云ひけるは、「御身、われより先立ち給はば、二たび妻をも持つまじき」などと云ひかはしけるが、ある時、女房、風のこちして、つひに空しくなりけるが、今はの時に、夫に云ひけるは、「われを不憫とおぼしめさば、土葬、火葬は無用なり。我らが（私の）腹を裂き、はらわたを取り出だし、内へ米を詰め込みて、上をば漆にて、十四へん、塗りかため、外面に持仏堂をこしらへ、我をその内に入れ、鉦鼓を持たせ置き、朝夕我が前にきたり、念仏をすすめてたべ」と、云ひ置きて、遂に空しくなり

にける。

男、遺言の如くに、女の腹をあけ、米を入れ、漆にて塗り、持仏堂^{こし}を拵らへ入れ置き、それより二とせばかり、妻をも持たず、念仏してゐけるが、友達、無理にすすめて、妻を持たせけるが、此の妻いかなる子細^{しさい}とも云はず、暇^{いとま}を賜はれ（離縁してください）と、しきりに云ふ。男、いろいろとなだむれども、「とにかく御身に添^{すま}ひて、この家に住ひすることとなるまじ」とて、帰る。

その後、幾人^{いくたり}呼びても、皆、同じ如くに云ひて、帰りければ、ただ事ならずと思ひ、さまざま祈禱^{まこと}などして、又妻を呼び迎へければ、真に祈禱のしるしにや、此のたびは、五、六十日ほどもなにの子細もなかりしが、

ある夜の事なるに、男は外^{ほか}へ遊びに行き、妻は女房どもを集め物語りしてゐけるに、四つ時分（午後十時）のころ、表より鉦鼓の音、聞こえける。いづれも不審をなして聞けば、次第に近くなりて、奥の間へきたる。みな人、おどろき、戸、かけがねを固め、身をちぢめ居たりしに、二間、三間の戸を、ささりさりとあけ、今、一戸^{ひとへ}になりて、女の声にて、「ここをあけ給へ」と云ふ。然れども、いづれも怖れて音もせず。

時に女、「ここをあけ給はずは、是非もなし。まづ此の度は帰るべし。重ねて参りて御とき申さん。それがしが、参りたること、かまへて（決して）夫に語り給ふな。若しも語り給ふものならば、御身のいのちは有るまじ」とて、又鉦鼓を打ち、帰りける。あまりに凄まじき事也とて、物の間より覗^{のぞ}きてみければ、十七、八なる女の姿にて、顔より下は真黒にて、鉦鼓を持ちてゐたりける。

人々、驚き、夫の帰るを待兼ねゐけるが、暫くして、夫、帰りけれども、宵の言葉の恐ろしきに、その夜は語らずして、あくる日、ただ、「我らには暇を給はれ」と云ふ。夫、不審におもひ、「俄^{にわ}かに何とてかく云ふぞ」と問ひければ、ぜひなく昨夜^{ゆうべ}のありさま、物語りしける。夫、聞きて、「それは狐にてあるべし」と、さらぬ態^{てい}（何事もない様子）にて居たりけれども、「ぜひとも暇を給はれ」と云ふを、いろいろと云ひなだめ置きけるが、

その後、四、五日もほど経て、夫、また外^{ほか}へ出でけるあとにて、夜半

の頃、また表より鉦鼓の音して来たる。「すはや」とて、又戸、かけがねを固めなければ、女の声にて、「ここをあけよ、あけよ」と云ふ。みなみな恐れわななきゐけるが、俄かに眠^{にわ}たくなりて、かたはらの女房ども前後も知らず眠りけるこそ不思議なれ。

されども、本妻は眠らず居たところに、二重三重の戸を、さらりさらりとあけて、入るをみれば、黒色塗^{くしき}りたるをんななりしが、丈^{たけ}とひとしき髪をゆりさげて、本妻をつくづくとみて、「あら情けなや。以前それがしが参りたること、夫に語り給ふなと申せしに、はやくも語り給ふこと、かへすがへすも恨めしや」と、云ふよりはやく、とびかかり、本妻の首を捻^ねじきり、表をさして帰りける。

夫も聞きつけ、家に帰りて尋ねければ、下女ども、始め終りを物語りしける。夫、おどろき、持仏堂を開けてみれば、かの黒色なる女の前に、今の女房の首あり。夫、いふやう、「さてさて、汝は卑怯ものかな」とて、仏壇より引き下^{おろ}しければ、かの黒色の女房、眼^{まなこ}を見ひらき、夫の喉^{のどくび}頭に喰ひつきければ、夫も終^{つい}に空しくなりけると也。〔巻二の九〕

- (5) 和辻哲郎『倫理学』上巻（『和辻哲郎全集』第十巻、岩波書店、1962年）pp. 336-337による。
- (6) 自己の生を倫理的に捉えようとするときに立ち顕れてくる本来的自己というものは、本質的に他者から孤立した存在なのではなく、あくまでも他者との連関性の中で真の生き方に目覚めた自己なのだという点は、拙稿「死線を越えてなお生きる思想」（『国士舘哲学』第12号 pp. 29-35、国士舘大学哲学会、2008年）において指摘した。
- (7) 死を前にした者が自己の生の総体を問うとき、もはや存在しない後の世に思いを馳せることで「時間」という概念が意識されてくる点については、拙稿「倫理想としての「時間」をめぐる考察」（『国士舘哲学』第12号 pp. 56-68、国士舘大学哲学会、2008年）でもとりあげて論じている。
- (8) 倉野憲司校注『古事記』岩波文庫、1963年を参照した。
- (9) 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注『今昔物語集』新編日本文学全集、小学館、2000年を参照した。
- (10) 石田瑞麿校注『源信』日本思想大系、岩波書店、1970年を参照した。